

◎ 10月5日、教区慶讃法要お待ち受け大会を開催しました。

去る、10月5日、新川文化ホールにおいて富山教区宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要お待ち受け大会を開催いたしました。

当日は降雨の中、教区内住職、坊守、寺族、門徒、約320名の方にご参加いただきました。

さて、真宗大谷派では、現代人の苦しみについて「安心して人と人がともに生きていく人間関係が失われ、人々が不安と孤独に追い込まれている。それは

毎日の事件事故や、様々な社会問題となって現れている。そしてインターネットやAIの発達により、これまでの人間の営みがAIにとって代われようとしている。今、あらためて「人間とは何か」ということが問われている」と受け止めています。

この「人間とは何か」について、私たちは日ごろ念仏の教えから学んでいるわけですが、このたびは宗門外から霊長類学者の山極寿一先生をお招きし、「なぜ、人は満たされないのか ―現代社会にもとめられていること―」の講題にてお話をいただきました。人間は他者とのコミュニケーションによって信頼関係を築き、他者への高い共感と連帯を特徴とする生物で、1人ではなく他者とともに幸せを感じるようにできているのだということです。これは、例えば真宗で教えられている「出遇い」―深いところで他者や自己と、そして如来と出遇っていく―ということと、通ずるものがあるように感じられます。そうでありながら同時に、煩惱具足の身であるがゆえに互いに傷つけあってしまう。私たちの聞法生活にとってもたくさんの示唆をいただき、新たな視点となったのではないのでしょうか。

また、宗務総長の挨拶（長峯参務代読）にもありましたが、宗祖の御誕生、そして立教開宗を慶び讃えるということは、念仏の教えに出遇い、自らにかけられた願いに深くうなずき、そのご恩に報いていく歩みに他なりません。このたびのお待ち受け大会も、その準備段階を含めてすべてがこの慶讃の営みであったことと拝察いたします。開催に向けてご尽力いただきました方々に感謝申し上げます。

ここに、本大会に参加された感想を寄稿いただきましたので紹介します。

~~~~~

高名な山極先生の講演を聞ける機会を設けていただきありがとうございました。前半では、霊長類学の視点で見た人類史という私には未知の分野の内容であり、大変刺激を受けました。印象的だったのは、ゴリラと人間が登場した動画でした。ゴリラが何とかツアーガイドの人と対面しようと動き回る姿はとても微笑ましく感動的でした。「人間同士の共感は、共食・共同保育・情報共有で高められる、そして人が言語を使用する以前は、音楽や踊りといった身体の共鳴で共感していた」ということは重要な説示でした。後半では、「現代社会の生産性向上は、人間の欲望を無限に拡大して、人間も地球もこのままだと滅んでしまう」という痛烈な警鐘が

心に響きました。「これは科学技術だけでは解決はできない問題であり、文化と科学が共鳴しあう新たな環境倫理が必要である」という人類共通の課題を指摘していただきました。今回の講演では、人類史という視座が大変新鮮で、私にとって宗教の意義を見直す上で貴重な示唆であったと思います。

(第10組 蓮光寺門徒 金尾 誠一氏)

~~~~~

住職からお待ち受け大会に誘われたとき、チラシー面のゴリラに興味を持ち、参加しました。

京大前総長のお話は難しく理解できないのではと思ったけど、動物や人間の進化の話が面白く、時間の過ぎるのを忘れて聞き入りました。

特にゴリラとサルの違いは驚きです。ゴリラは出会ったとき、目と目を合わせ相手と話し合う事、サルは出会った瞬時に力の上下に気付き頭を下げる話、人間もゴリラの様に話し合えば戦いも核も要らない世界になるのではと考えます。できないのが人間の欲と愚かさだと思います。

家の周りを見るとき、農業は機械の進歩で労働が本当に楽になり、また農薬で自然の草花、川の生物は絶滅状態です。他方その自然を回復する若者の姿をテレビで見ていたとき、これも人間の知恵と思い安堵しました。人間の欲望には切りがありません。戦後の暮らしを知る私は、今は夢のような毎日です。自然や周りの人達に感謝するとき、手と手が合わさり頭が下がるのです。

(第10組 福恩寺門徒 古里 幸子氏)

~~~~~

大会委員長ではあったが、講師に山極壽一氏を迎えることになって、一抹の不安を抱いていた。なぜお待ち受け大会に霊長類学者を招聘するのか？ということだ。実際、ポスターの表紙がゴリラであったことに違和感を持っていた方はけっこういらっしやっただよ。しかし、その不安は杞憂に終わった。

山極氏は人間が人間である所以は「共感する力」であるとされた。共に食事をして、共に子育てをするのが人間の長所であり、コミュニケーション能力を高めるために人間は進化し、脳を巨大にしていった。言語を獲得したのはその後であり、産業革命、農業革命を経て、人間は今や地球を破滅させるまでに肥大している。この地球の危機において山極氏が提唱するのは、人間が「共感する力」を取り戻し、所有していくのではなく、全てをシェアしていくことである。講題は「なぜ、人は満たされないのか」であったが、それは仏教の「執着をいかに離れるか」という課題と重なっていると思った。霊長類学と浄土真宗には意外と接点があった。私たちは「煩惱とは何か」「煩惱とどう付き合っていけばよいのか」という問いを常日頃課題としているが、それは未来の地球をどうしたら救えるのかという、重大な視座へとつながっていくのではないかと思った。

龍樹「ことごとくよく有無の見を摧破せん (正信偈)」

(第11組 玉永寺住職 石川 正穂氏)